

Tchaikovsky Serenade for Strings in G major, Op.48 Villa-Lobos Bachianas Brasileiras No.9

TBSK 管弦楽団 第1回弦楽演奏会

2020.3.21 | 横浜市神奈川区民文化センター かなつくホール

後援 | 日本ヴィラ＝ロボス協会

プログラム

W.A.モーツァルト - オーボエ四重奏曲 ヘ長調 K.370 より 第3楽章

Wolfgang Amadeus Mozart - Oboe Quartet in F-dur K.370 3. Rondeau: Allegro

Ob 岸本史直 Vn 中山麻友 Va 宮崎千奈 Vc 安野佑希

J.ブラームス - 弦楽五重奏曲 第2番 ト長調 作品111 より 第4楽章

Johannes Brahms - String Quintet No. 2 in G-dur Op. 111 4. Vivace ma non troppo presto

Vn.1 砂川湧 Vn.2 安藤孝志 Va.1 高橋熙 Va.2 中石光紀 Vc 末竹裕貴

S.プロコフィエフ - 弦楽四重奏曲 第2番 ヘ長調 作品92 より 第3楽章

Sergei Prokofiev - String Quartet No. 2 in F-dur, Op. 92 3. Allegro

Vn.1 中山麻友 Vn.2 佐藤直人 Va 柴田淳志 Vc 安野佑希

R.シュトラウス (R.レオポルト編) - メタモルフォーゼン TrV.290 〈七重奏版〉

Richard Strauss(arr. R.Leopold) - Metamorphosen, TrV.290

Vn.1 平山奈菜子 Vn.2 安藤孝志 Va.1 馬目博志 Va.2 高橋熙

Vc.1 落合春一 Vc.2 泊亜依 Cb 宮本貴幸

J.クレンゲル - 12本のチェロのための讃歌 作品57

Julius Klengel - Hymnus for 12 Cellos, Op. 57

Vc.1 末竹裕貴 Vc.2 遠藤直輝 Vc.3 安野佑希 Vc.4 須藤ひかる Vc.5 権英晃 Vc.6 原島教道 Vc.7 泊亜依

Vc.8 河谷稔 Vc.9 渡邊佳晶 Vc.10 金田智樹 Vc.11 柳下美樹, 田代悠介 Vc.12 落合春一

C.ブランビー - コントラバス四重奏のための組曲 イ短調

Colin Brumby - Suite for Double Bass Quartet in A-moll

Cb.1 宮本貴幸 Cb.2 嵯峨早友佳 Cb.3 武田雄太 Cb.4 山六真由

J.S.バッハ - ブランデンブルク協奏曲第3番 ト長調 BWV57 より 第1楽章

Johann Sebastian Bach - Brandenburg Concerto No.3 in G-dur, BWV57 1. Allegro

Vn.1 砂川湧 Vn.2 川名紗貴 Vn.3 早川智之 Va.1 白石隆一郎 Va.2 佐久間棕子 Va.3 柴田淳志

Vc.1 泊亜依 Vc.2 遠藤直輝 Vc.3 河谷稔 Cb 嵯峨早友佳

(休憩 15分)

H.ヴィラ＝ロボス - ブラジル風バツハ 第9番

Heitor Villa-Lobos - Bachianas Brasileiras No. 9

1. 前奏曲、ゆっくりと神秘的に Preludio: Vagaroso e mistico
2. フーガ、少し急いで Fuga: Poco apressado

P.I.チャイコフスキー - 弦楽のためのセレナーデ ハ長調 作品48

Peter Ilyich Tchaikovsky - Serenade for Strings in C-dur, Op.48

1. ソナチネ形式の小品 Pezzo in Forma di sonatina: Andante non troppo – Allegro Moderato
2. ワルツ Waltz: Moderato (Tempo di valse)
3. エレジー Elegie: Larghetto elegiaco
4. ロシアの民謡の主題による終曲 Finale (Tema russo): Andante – Allegro con spirito

指揮 安藤孝志

ごあいさつ

本日はお忙しい中、TBSK 管弦楽団第1回弦楽演奏会にお越しいただき誠にありがとうございます。沢山ののお客様を前に当団初の弦楽演奏会の本番を迎えられることを団員一同非常に嬉しく思っております。

オーケストラという大きな生き物の中で弦楽器奏者は不思議な立ち位置にあります。オーケストラの半数以上を占める人数があり、オーケストラの舵取り役とされるコンサートマスターというポジションもファーストヴァイオリンのトップが務めると決まっているため、一見すると弦楽器はオーケストラの花形のようにもみえます。しかし、その人数が多すぎるためか普段のフルオーケストラの演奏において弦楽器奏者一人一人にスポットライトが当たることは少なく、一人ひとりの奏者としてよりも弦楽器のパート全体としてでどのような演奏をしているのかに焦点が当たりやすいと言えます。

それでも当団の弦楽器パートは音楽を愛してやまない個性的な団員が本当に沢山在籍しております。本日はそんな当団の弦楽器奏者たちが「ソリスト」として躍動する弦楽アンサンブル、そして普段のオーケストラとは違い弦楽器奏者だけの弦楽合奏など普段のTBSK 管弦楽団の定期演奏会とはまた違う当団の一面が見えるのではないのでしょうか。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、多くのイベントが開催を自粛している中、当演奏会の開催可否につきましても団内で議論がありました。それでもこの演奏会を開催すると判断したのは、開催にあたりお客様に安心して演奏をお楽しみいただける環境を整える体制が揃えられたこと、そして何より当演奏会へかける団員一人一人の熱意の強さがあったからです。本演奏会が実施できるよう各方面で知恵を絞り奔走してくれた団員たちには本当に感謝の言葉しかありません。

開催に先立ち団員一同本日は感染拡大防止のために最善を尽くして参りますが、ご来場の皆様におかれましても、マスク着用の徹底、咳エチケットの励行等に何卒、ご理解ご協力いただきますようよろしくお願い致します。

最後に本演奏会開催に先立ちまして多大なご指導をいただきました久世武志先生、手塚貴子先生そしてこのような状況下で演奏会を実施することにご理解、ご支援頂きました皆様へこの場を借りて御礼申し上げます。それではTBSK「弦楽団」が紡ぎ出す弦楽の世界をどうぞ最後までごゆっくりとお楽しみください。

砂川 湧

楽曲解説

W.A.モーツァルト - オーボエ四重奏曲 ヘ長調
K.370 より 第3楽章
Wolfgang Amadeus Mozart - Oboe Quartet in F-dur K.370
3. Rondeau: Allegro

モーツァルトは23曲の弦楽四重奏曲を作曲しているが、それらは14～17歳期の13曲と26歳以降の10曲に大別される。ブランクの18～25歳期には5曲の木管楽器+弦楽器の四重奏曲が作曲された。この時期を挟んでモーツァルトの弦楽四重奏曲のスタイルは大きく変化しており、独奏木管を加えた四重奏曲はモーツァルトの弦楽四重奏曲の独自性確立に非常に重要な役割を果たした。

この曲は、当時大変な人気を博したオーボエ奏者フリードリヒ・ラムの演奏（オーボエ協奏曲 ヘ長調 K.314）を聴いて感激したモーツァルトが、ラムのために作曲したものである。当時の楽器ではほぼ不可能とされる音域（高いファ）までが用いられており、モーツァルトのラムに対する絶対的な信頼がうかがえる。今回は3つの楽章からなるこの曲の第3楽章のみを演奏する。華やかで躍動的なロンドである。

（岸本）

J.ブラームス - 弦楽五重奏曲第2番 ト長調
作品111 より 第4楽章
Johannes Brahms - Strings Quintet No.2 in G-major,
Op.111 4. Vivace, ma non troppo presto

本曲はヨハネス・ブラームス（1833-1897）の作曲最晩年期にあたる1890年に作曲された。弦楽のみの室内楽曲としては最後の曲となる。

ブラームスの弦楽五重奏曲は二声に分かれるヴィ

オラが編成面で特筆される。これにより内声部の響きが厚みを増しているのは勿論のこと、独特の奥深い音色を活かした旋律楽器としての役割も随所に与えられている。本楽章でも冒頭ヴィオラが速い主題を提示する。曲はこれを軸として、時折穏やかなヴァイオリンの旋律を交えつつ、快速なテンポで進行される。

元々本曲は交響曲第5番として構想されていた。そのため交響曲の片鱗を見せるような響きや形式が全楽章を通して見られる。本日は第4楽章のみの演奏だが、他の楽章も是非ともお聴きいただきたい。

（高橋熙）

S.プロコフィエフ - 弦楽四重奏曲 第2番 ヘ長調
作品92 より 第3楽章
Sergei Prokofiev - String Quartet No. 2 in F-dur, Op. 92
3. Allegro

弦楽器の可能性は無限大である。多様な奏法を駆使することで、弦楽器は打楽器にもなる。

作曲家セルゲイ・プロコフィエフ（1891-1953）は、第2次世界大戦中にコーカサス地方のカバルダに疎開していた。その最中で、カバルダに伝わる民謡を採り入れて作曲されたのがこの弦楽四重奏曲第2番である。とりわけ本日演奏する最終楽章の第3楽章には、中東に伝わる撥弦楽器や打楽器を模した響きが随所に現れる。弓で弦を擦る際、極端に駒寄りを擦ることで「ギャッ！！」という身の毛もよだつ音を出すスル・ポンティチェロ（sul ponticello）、今にも弦が切れてしまうかと思うほどの重音によるピッツィカート（pizzicato）など、特殊奏法にも注目していただければと思う。

（安野）

R.シュトラウス (R.レオポルト編) -
メタモルフォーゼン TrV.290 〈七重奏版〉
R.Strauss (arr. R. Leopold) - Metamorphosen, TrV.290

本作はリヒャルトの晩年、1945 年の作品である。メタモルフォーゼンは日本語に置き換えると「変容」となる。昨年 5 月に行われた TBSK フェスティバルでは 23 人のソロ弦楽器奏者による原曲の演奏をお届けしたが、今回は 7 人の弦楽器奏者向けに編曲されたレオポルト版を演奏する。

第二次世界大戦の影響か、曲は重々しい空気と共に始まる。リヒャルトが描いたものは彼の理想なのか、苦しみなのか、様々なフレーズが奏でられながら曲は大きく「変容」していく。曲の終盤、原作では「追悼」の語がある箇所は本作品で「重く、ゆっくり」に変わり、曲は静かに終わりに向かう。

(関口)

J.クレンゲル - 12 本のチェロのための讃歌 作品 57
Julius Klengel - Hymnus for 12 Cellos, Op. 57

作曲者のクレンゲル (1859-1933) は、ドイツのライプツィヒで活躍したチェリストである。優れた教師でもあり、門下にフォイアマン、ピアティゴルスキー、オネゲル、斎藤秀雄等の名音楽家を輩出した。「讃歌」は、彼の友人でドイツの名指揮者ニキシュの 65 歳の誕生日を祝って、11 人の弟子と演奏するために作曲された。しかし初演は 2 年後の 1922 年、ニキシュの葬儀においてだった。それから 50 年後の 1972 年、ベルリン・フィルの 12 人のチェロ奏者たちがザルツブルクで蘇演して以来、チェロアンサンブルを代表する曲として親しまれている。チェロの幅広い音域を活用しながら、四重奏、五重奏、そして十二重奏と形を変えて奏でられる、祈りの音楽を味わって頂きたい。

(河谷)

C.ブランビー - コントラバス四重奏のための組曲
イ短調
Colin Brumby - Suite for Double Bass Quartet in A-moll

この曲は 1975 年、オーストラリアの作曲家である C.ブランビーがコントラバス四重奏のために書いた曲である。

ブランビーはとても調性を大事にしており、当時一般的となっていた無調音楽に対し、疑問を呈している。この曲も A-moll の持つ優しい響きを非常に大事にしており、普段オーケストラで最低音を担当しているコントラバスの響きが活かされるよう作曲されている。この曲の持つオルガンにも似たコントラバスの豊かな低音を体感していただきたい。

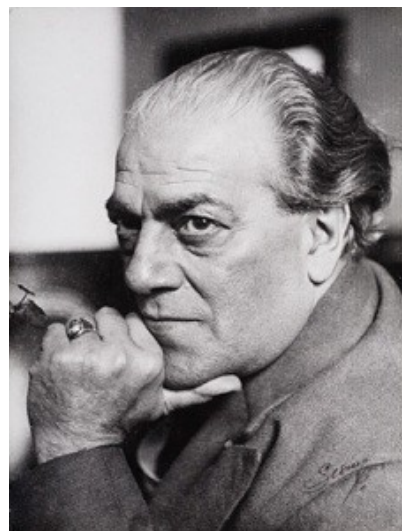
(宮本)

J.S.バッハ - ブランデンブルク協奏曲第 3 番
ト長調 BWV57 より 第 1 楽章
Johann Sebastian Bach - Brandenburg Concerto No.3 in
G-dur, BWV57 1. Allegro

ブランデンブルク協奏曲は J.S.バッハ作曲の 6 つの協奏曲からなる協奏曲集である。ブランデンブルク辺境伯に献呈された作品で、献呈時期は 1721 年 (36 歳) とされている。本日演奏する 3 番は中でも比較的初期に作曲された作品と言われており、ワイマール時代 (23~32 歳) という説もある等、我々からしてもバッハが同年代の時期に作曲した可能性のある数少ない作品の 1 つであろう。

編成は Vn3、Va3、Vc3、通奏低音という同協奏曲集の中で唯一特定の独奏楽器がない (全員が独奏部を持つ) 協奏曲となっており、様々な旋律を楽器の隔てなく交互に奏でる。弦楽合奏へ繋がるバッハの名作を、是非お楽しみいただきたい。

(佐久間)



「ブラジル風バッハ」、この題名から連想されるのは、ラフな服装でサンバを踊らんとする J.S.バッハの姿であろうか。しかし、この訳語は、多くの識者が指摘するように不完全なものである。Brachianas と Brasileiras は、ともに形容詞であり、より正確に訳出するなら「ブラジル風・バッハ風」であろう。バッハがブラジル風なのではなく、ブラジル風でもあり、バッハ風でもあるのだ。バッハ的な技法とブラジルのリズムや旋律の融合、それが標題の示さんとする真意である。

エイトル・ヴィラ＝ロボスは、1889年に当時はブラジルの首都であったリオデジャネイロで生まれた。音楽愛好家であった父の影響のもと、小さい頃からギターやピアノ、クラリネットと多様な楽器の演奏を習得し、独学で作曲の技法を身につけた。また、ブラジル各地を旅行し、当地の民謡や音楽に触れるなど多感な青年期を過ごした。1923年に花の都パリへと渡航したヴィラ＝ロボスは、欧州各地で自作の演奏を行い、欧州楽壇での名声をも得ていった。そして帰国後、母国の音楽教育にも携わる傍らで書かれたのが『ブラジル風バッハ』という作品群であった。

『ブラジル風バッハ』は、全部で9作書かれている。この連作の特色としては、先述したブラジルのバッハ的な折衷性に加えて、楽器編成が不統一であることが挙げられよう。チェロ8本のために書かれた第1番に始まり、第6番はフルートとファゴットの二重奏、第7番と第8番は3管編成のオーケストラと、大小様々な多様な楽器編成のために書かれている。第9番は、1945年に弦楽オーケストラもしくは無伴奏合唱のために書かれた『ブラジル風バッハ』最後の作品である。今回は前者での演奏であるが、後者による演奏は同じ旋律にあるにも関わらず全く異なった音楽体験をもたらす。教会音楽的な神秘性がより強調され、楽器では無く人間の声に根ざした民謡的要素がより顕となっている。

1. 前奏曲、ゆっくりと神秘的に Preludio: Vagaroso e mistico

全奏による唐突なスフォルツァンドに続いてヴィオラにより旋律が提示される。音楽は途切れることなく Fuga に突き進む。

2. フーガ、少し急いで Fuga: Poco apressado

チェロより始まるフーガ。11/8拍子という変拍子とバッハ風の対位法の融合が、ヴィラ＝ロボスの作曲技法の真髄を見せる。

(高橋佑希)



本日最後にお送りする弦楽のためのセレナーデは、今から丁度 140 年前の 1880 年に P.I.チャイコフスキー (1840-1893) が親友のチェロ奏者のために作曲した楽曲である。

セレナーデとはラテン語の *Serenus* (穏やかな) を語源としており、18 世紀に晩餐会などで人々をもてなすことを目的とした器楽合奏のための小規模な楽曲のことをいう。その語源の意味から厳粛さの求められる教会音楽や形式がガッチリと決まった交響曲などとは一線を画し、娯楽性や親しみやすさを重視した曲と捉えることができよう。

チャイコフスキーは本曲について手紙でこう述べている。「私はこの弦楽合奏のためのセレナーデを内面的な衝動に駆られて作りました。この作品は、感情に満ちたものであり、それゆえ、敢えて言いますが、真の価値を失わないものです。」本日はチャイコフスキーが楽曲に込めた感情、そして真の価値を団員一同で存分に表現し、皆様に伝えることができれば幸いである。

曲は彼自身が敬愛するモーツァルトを意識したソナチネ、優雅なワルツ、感情に満ち溢れたエレジー、そして軽快さとドラマチックさを併せ持つ終曲の 4 楽章に分かれている。

1. ソナチネ形式の小品 Pezzo in Forma di sonatina: Andante non troppo – Allegro Moderato

強烈かつ情熱的な強奏で始まる序奏は低弦、ヴァイオリンへと引き継がれつつ徐々に収まりを見せる。その後、重厚な第一主題と軽やかな第二主題が現れ、それぞれ二度繰り返された後、序奏が再度出現し第 1 楽章は結ばれる。

2. ワルツ Waltz: Moderato (Tempo di valse)

ロシアのワルツ王の異名を持つチャイコフスキーならではの軽やかなワルツである。優雅な主題を奏でつつ、ところどころ弦楽器ならではのピチカートが曲の軽やかさを際立たせる。

3. エレジー Elegie: Larghetto elegiaco

教会旋法を用いた静かでも悲しげな序奏が四度繰り返されたのち、曲は突如として盛り上がりを見せピチカートを伴奏とした美しく情熱的な弦楽合奏の主題へと移る。再び序奏が再現された後、最後は消え入るようなフラジオレットによる和音にて終結し、その響きの中、第 4 楽章へと移行する。

4. ロシアの民謡の主題による終曲 Finale (Tema russo): Andante – Allegro con spirito

実在する 2 つのロシア民謡の主題をそのまま引用している当時としては斬新な形態の終曲である。弱音器を付けた弦楽器によって静かに演奏される序奏は徐々に第 1 主題の音形を形作っていき、主部へと移行していく。終結部では第 1 楽章冒頭の序奏が低弦によって強奏され、曲はなだれ込むように終わりを迎える。

(砂川)

参加者一覧

Violin

安藤孝志
安納爽響
糸長宏樹
江部ゆり夏
岡田溪悟
加藤峻一
川名紗貴
小林周峰
佐久間棕子
櫻田泰斗
佐藤直人
砂川湧 ○
高須里奈
高橋熙
高橋佑希
千野彰嵩
中山麻友
早川智之
平山奈菜子 ○
福島宏章
松永菜子
(他1名)

Viola

柴田淳志
白石隆一郎 ○
高野知広
手塚貴子 *
中石光紀
久嶋悠暉
馬目博志
宮崎千奈

Violoncello

遠藤直輝
落合春一
金田智樹
河谷稔
権英晃
末竹裕貴
須藤ひかる
田代悠介
泊亜依 ○
原島教道
柳下美樹
安野佑希
渡邊佳晶

Contrabass

嵯峨早友佳 ○
武田雄太 *
濱理佳子
宮本貴幸
山六真由

Oboe

岸本史直

弦楽演奏会運営

代表 | 嵯峨早友佳
コンサートマスター | 砂川湧
指揮 | 安藤孝志
渉外 | 柴田淳志
早川智之
会計 | 江部ゆり夏
広報 | 佐久間棕子
安野佑希
会場 | 平山奈菜子
録音 | 関口俊貴

○ 弦楽合奏パートトップ

* 賛助

次回の演奏会情報

【TBSK 室内管弦楽団 第3回演奏会】

日時 | 2020年4月12日(日) 13時30分開場 14時開演

場所 | かつしかシンフォニーヒルズ モーツァルトホール

指揮 | 久世武志

曲目 | ベートーヴェン - 「レオノーレ」序曲 第3番

モーツァルト - ピアノ協奏曲 第20番

J.S.バッハ=ヴェーベルン - 6声のリチェルカーレ〜「音楽の捧げ物」より

ストラヴィンスキー - 組曲「プルチネルラ」

入場料無料・全席自由